

# Wesley Hall News



高等部卒業式  
(2007年3月)

青山学院スクール・モットー

地の塩、世の光

The Salt of the Earth, The Light of the World

(新約聖書 マタイによる福音書 第5章13～16節より)

No.95  
2008.3.6.

## 特集 卒業

説教 “Mission Impossible?” .....	西田恵一郎	2
●卒業生からのメッセージ		
幼稚園 .....	戸須 由美/久保小枝子	4
初等部 .....	立見 亮太/寒竹 茜	5
中等部 .....	小田井 孝/淡輪 優紀	4
高等部 .....	浦上 動太/小松 茜	6
女子短期大学 .....	加納 孝代/佐藤 知子	7
大学 .....	光延伊知朗/長坂 帆那	6
●出発にあたって—先生方からのすいせん図書— .....		8
●青山学院を退職するに当って、一人の宣教師の思い .....	ロバート・M・タヒューン	10
●青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料 その22 .....	氣賀 健生	12
●私の教会 日本基督教団 狛江教会 .....	深谷いづみ	14
●〈コラム〉イースター .....		15
●宗教センターだより .....		15

## 説 教

# “Mission Impossible?”

ヨハネ9章 1～3節

西田 恵一郎

中等部宗教主任



「Missionとは、どういう意味でしょう？」と質問するとほとんどのクラスで生徒が口にするのは“M:i: Ⅲ”であり、トム・クルーズです。そして、その関連で「使命」という答えが出てきます。改めて、メディアの影響力の大きさを思わされます。しかし、「使命」などと言われても、平凡な毎日を送っている私たちには縁遠いものを感じられるのではないのでしょうか。歴史を振り返ってみても、出エジプトの指導者モーセ、預言者イザヤやエレミヤ、また現代ではシュバイツァーやマザー・テレサといった偉大な人物が使命に生きた人として頭に浮かんでくるだけだからです。

使命とか召命を少し身近なものと感じさせてくれたのは、宗教改革者ルターだと思います。ドイツ語の「ベルーフ」は職業の意味ですが、語源としては「喚ばれる」とか「召される」という意味があります。ですから、一般の人たちも、自分の仕事を神様から与えられた使命・召命として受け取り、それぞれの仕事に意味を見出し、励むことができるようになったのです。

故松永晋一氏（元福岡女学院大学学長）は、使命という語について次のような解説をされています。「使命という語は、本来は、使者がその命令を遂行するという意味だそうですが、文字としては、命を使う、と書きます。人は誰でも与えられた命を使って生きています。生まれてから死ぬまで、人は与えられた命を自分の命として使用することができます。……わたしたち一人ひとりをこの地上に遣わして下さった方の御旨に従い、自分自身に課せられたつとめを果たすことこそ、使命の名にふさわしいのであり

ます。」

では、どのようにして自分に課せられた使命を見つけることができるのでしょうか。性格検査や適性検査のような分析に基づくものも決して否定できないと思います。しかし、自分の命を何に使いたい、何に対して心が動かされるかに目を向けることこそ必要なのではないのでしょうか。「あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神のよしとされることだからである」（口語訳・ピリピ人への手紙 2章 13節）と記されているように、神様は一人ひとりの心に働いておられます。ですから、心に響いてくる神様からの問いかけに敏感でありたいものです。この問いかけは、はっきりと分かる場合もあれば、そうでない時もあるでしょう。そうでない時は、色々模索することも必要なのではないのでしょうか。「～すべき」「～した方が得」という言い方でしばしばことを促され、「～したい」や「～せずにはいられない」を模索する時間が十分に与えられていないように思います。「～すべき」「～した方が得」は教えることができ、しかもインスタント食品のように素早く手早く提供できるかもしれませんが、「～したい」「～せずにはいられない」は、試行錯誤の繰り返しのうちに自分で見出すしかないものであらうと思われまます。私たちは、あまりにも忙しすぎて、自らに模索を許すほどのゆとりがないのかもしれませんが。あるいは、インスタントに慣れすぎて、模索することに面倒くささやじれったさを感じてしまうのでしょうか。

時間の流れ方や人の在り方が現代とは違うと

はいえ、モーセが使命のために立ち上がるまでには80年もかかりました。預言者イザヤの召命の記事は、最初の預言活動に敗北感を覚えた後の二度目の召命だったともいわれています。ナイチンゲールは、6歳の時から使命感について悩み、自分の進むべき道を見出したのが25歳の時で、実際に道がひらけたのは34歳の時だったそうです。またシュバイツァーは、若くして学問や音楽において成功や名声をかち得たにもかかわらず、28歳の頃から孤児や捨て子の世話や免囚保護事業など、いろいろとやってみるうちに、自分が本当にしたかったことを見出したのだそうです。彼らは模索の中で「これをせざるを得ない」「これがしたい」というものを見出していきました。使命を見出す、あるいは明確にするには時間が必要な場合もあるように思います。本人が忍耐しながら、模索することはもちろんのこと、周りの人たちも待つてあげる勇気と忍耐が必要なのではないのでしょうか。

使命は「何をするか」でしか現されないものではありません。存在するだけで実現される使命もあります。「行う」使命ではなく、「ある」(存在)の使命、利用価値ではなく存在価値と言えるのでしょうか。ヨハネによる福音書9章には、生まれつきの盲人が癒された出来事が記されています。1～2節に「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか』とあります。当時、病は罪の罰、ばち、あるいは呪いと信じられていました。イエスの弟子たちですら、そのような考え方から自由になっていませんでした。そこで、イエスはお答えになります。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』(3節)。そして、唾でこねた土を盲人の目に塗り、シロアムの池に送ります。その後、彼は目が見えるようになり、イエスと再会し、彼を救い主と信じます。「神の業」とは、盲人の目が見えるようになったという奇跡のことでもあるでしょう。しかし、私たちがこの出来事に導かれて知る「神の業」は、

イエスと出会い、彼が誰であるか、つまり彼こそ救い主であることが見え、彼を通して神が見えるようになることではないのでしょうか。この「神の業」を現す主体は常に神であり、人はその業を現すための道具・器なのです。道具や器は、存在していれば用いる者次第で大きな価値を生み出します。この盲人は、癒されて目が見えるようになって、動けるようになったから「神の業」を現せたのではなく、たとえ癒されなくてもイエスと出会い、神を見ることによって「神の業」は現されたと思うのです。癒されて動けるようになったとしても、動けないままであったとしても、それぞれの使命は遂行されることでしょう。

1990年、私の次男は不治の病のために天に召されました。7年と10ヶ月の短い、それも食べられない、歩けない、見えない、話せない、理解できないというハンディキャップを負っての生涯でした。その間、彼は世話をしてもらうばかりで、行為としては何もしませんでした。何もできなかったのです。しかし、何と多くの、そして、大きな事を私たち家族に与えてくれたことでしょう。彼がいるだけで、つまり、彼の存在自体が私たちに喜びを与え、家族を包み、数えきれないほどのことを教えてくれました。命を削って、私たち家族に何かを示そうとしていたように思えます。

こういう使命の遂行の仕方もあることを覚え、私たちも周りの評価や損得で使命を測らないようにしたいものです。私たちすべての者には、何らかの使命が与えられています。そして、それぞれの使命を全うするために、賜物も与えられています。歩き続けましょう、急がず、たゆまず、ありのままに。神の業は、そんなあなたを通して現わされるのです。

キリスト者の詩人、八木重吉は次のように詠っています。

「花はなぜ美しいか  
ひとすぢの気持ちで咲いてみるからだ」

これでいいのではないのでしょうか。



## 親子の卒園

戸須 由美  
(卒園児保護者)

「今日はロケット鬼をして遊びました。みんなと一緒に楽しく遊べました。神さま、ありがとうございました。また一緒に遊ばなかったお友達もみんな楽しく遊べて、神さま、本当にありがとうございました。」

私の子どもの降園前のお祈りです。年少のときはお祈りといえば自分中心で「楽しかった」「面白かった」だけでしたが、年長

となって、自分の仲間を考え感謝する気持ちを、また、見えないところで遊んでいる友達のこと、自分の思いを通じて神さまに感謝する気持ちを持つことが出来るようになりました。幼稚園での毎日のお祈りをとおして、子どもの心の中に思いやりや見えないものに目を注ぐ力が生まれたと先生方のお導きに心から感謝いたします。

二人の子ども合わせて6年間の園生活で、親の私も学び成長させていただきました。「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」この大好きな聖句を心にとどめ、親子共々卒園いたします。皆様、ありがとうございました。



## 希望をもって

久保 小枝子  
(ゆり組担任)

私は子ども達の3年間の歩みを振り返る時、神様の御業に気づき、驚き、喜ぶ姿が心に残ります。年少組の時は、雨や風、動植物など自然の営みを不思議に思い「どうして」と傍らにいるおとなに尋ね、神様の御業を感じ始めました。年中組の時、皆は聖書の話に耳を傾け始めました。良い羊飼いの例えは、神様がどのような方であるか

を感じ「もう一度話して」と目を輝かせて言った皆の顔が印象的でした。年長組の時は、モーセの話に夢中になりました。40年旅を続け、神様との約束の地を目前に亡くなったモーセに「そんな」と叫び、落胆した皆の顔は忘れられません。次にヨシアが立てられ神様がおっしゃった「わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。…強く、雄々しくあれ」(ヨシア記1章5～6節)との御言葉に希望を見出し、喜んだ皆の姿がありました。こうして歩んだ3年間、これからも聖書の御言葉を聴き、神様の愛を感じ、どんな時も希望をもって歩んで欲しいと願っています。



## 帰らざる川

小田井 孝  
(教諭)

題名と主題歌に惹かれたアメリカの映画で、『帰らざる河』という西部劇がある。その一場面に、主人公親子がインディアンに追われながら馬泥棒を追って、激流を筏で下っていく所があった。

人生は、「時」という一度きりしか下れぬ川に浮かぶ「筏」のようなものかもしれない。その川は、水量が豊かか乏しいか、流れ

が激しいか緩やかか、行く手を阻む岩が多いか少ないか、人さままだらう。しかし、どんな川であれ川であるからには、流れの遅い所もあれば速い所もあり、浅瀬もあれば深みもある。

途中、深い悲しみや苦しみに捕らわれた時、「止まぬ雨はない」という言葉を思い出そう。

途中、行き先に不安を覚えた時、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。」(マタイ：6章34節)を思い出そう。

川下りの長い旅は始まったばかり。難所を乗り切って無事に大海にたどり着けるようにと願っています。卒業おめでとう！

## 初等部での出会い



たつみ  
**立見 亮太**  
(6年杏組)

僕の初等部での6年間は沢山の出会いがあった。どんな事も、まず出会いから始まる。それは、クラスのみんな、先生、リーダー、行く先々での土地の人だったり、自然だったり。そしてどんな朝も礼拝に始まり、神様と共に喜び、感謝の内に終わる。

学校の帰り道、友達と大学キャンパスの中で鬼ごっこをするのが楽しくて仕方な

かった。ところがある日、先生にみづかりおこられてから、帰りの楽しみが減り、がつくりした。でも、友達と並んで帰るだけで楽しいと思っていた。ほとぼりがさめた頃、ちょっとやろうとした時もあったが、たとえ誰も見ていなくても神様はお見通しだという事を思い出す。同時にどんな時でも神様は見守ってくれていると思うと、良い行いをしようと思う。

初等部で聖書との出会いがなかったら、こんな気持ちになっていたか分からない。中等部に行っても、神様と共にいる事をいつも心に、様々な出会いに感謝し毎日を大切に過ごそうと思う。



## 私の聖書

かんたけ  
**寒竹 茜**  
(6年桜組)

いつも教会で借りていた聖書を始めていただいたのは、なかよしキャンプでした。とても嬉しくて、「ペラペラ」とひらくと、あこがれの上級生になった気分がしました。夢中で読みはじめましたが、初等部には楽しい事がいっぱいあり、2年生になると、1年生に少しままんする様にひらくだけになってしまいました。3年生になり厚い旧

新約聖書をいただいた時、担任の稲葉先生が「今から読めば卒業までに読み終わりますよ」とおっしゃったので、一生懸命読み、3年生の間に旧約聖書を読み終わりました。その後、スピードは落ちましたが、初めて自分の聖書をもらった時の喜びを思い出して読み続けました。6年生の今はラストスパートです。がんばって読み終わり、中等部に入ったらまた旧約聖書を最初から読みたいです。私の家の本だにはお母さんが初等部の時に読んだ聖書があります。私も大人になって、毎日礼拝を守る事が出来なくなっても「私の聖書」を大切に読んでいきたいと思えます。聖書は私の宝物です。



## どんなことにも感謝しなさい

たんのわ  
**淡輪 優紀**  
(3年A組)

中等部での3年間は他では学ぶことのできないことがたくさんつまっていました。友達との信頼関係、勉強への努力、ひとつの仕事をやり遂げる大切さ、なかでも聖書の御言葉から気づかされることはいっぱいありました。

「いつも喜んでいなさい。たえず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」(テサロ

ニケ1:5章16～18節)もそのひとつです。「ありがとう。」など口にするのは簡単ですが、心から感謝するのはとても難しいことです。助けてもらったり教えてもらったり、普段の日常生活で感謝する場面は数え切れないほどありますが、それが当たり前になってしまうことが時々あると思います。だからこそ私は、どんな小さなことでも常に心から感謝しようと心がけています。少なくとも感謝の気持ちが伝えられたり、どこかで恩返しができたらいいと思っています。高等部に進学するにあたっての目標は、人から感謝される人になることです。先生方や友達には本当に感謝しています。3年間ありがとうございました。



## 大切なもの

浦上 動太  
(HR 305)

最後の授業、最後のテストも終わり、まもなく卒業式を迎えます。3年間を振り返ると、「目に見えないものを大切に下さい」という聖書の言葉が思い出されます。

僕は、暑い日も寒い日も3年間、水泳部で0.1秒でも速く泳ぐ為に練習してきました。努力したからと言って必ずしも成果が出るとは限らないのですが、どんなに辛く

過酷な練習だろうと部活の仲間と共に助け合い励まし合いながら乗り越えられたのは、目には見えない友情などの絆がつながっていたからだと思います。卒業後、皆の進路はまちまちですが、この絆はずっとどこかでつながっていると思います。

この3年間、僕は水泳という自分の好きな事に没頭でき、泣いたり、笑ったり色々な思いをしたけれど、こんなに無我夢中になれた高等部生活はまさに青春でした。この様な環境を与えて下さった先生方、いつも明るく個性豊かなHR305のみんな、そして何よりも共に泳ぐことが出来た部活の仲間、皆と出会え、この高等部で学べた事に感謝しています。



## 高等部での出会い

小松 茜  
(HR 308)

2～3年のクラス(208、308)、1年のクラス(108)、大好きな友達、ラグビー部、素敵な先生方…、この3年間はたくさんの出会いで溢れていました。「出会いは偶然ではなく必然である」という言葉があるように、私にとっては高等部での全ての出会いが必然のものでした。

出会いとは、神様が用意してくださって

いるプレゼントだと思っています。神様は私達に出会いを通してたくさんの事を教えてくださいます。出会いの中には、幸せなものも辛いものもあります。悩んだり傷ついたりするのは嫌な事だけれど、人はその分強く優しくなれるのです。だから神様がくださるどんな出会いも大切であると思うのです。

いつも楽しかったクラス、毎日のようにあった部活、みんなと頑張ったバレ大(バレーボール大会)、文化祭と後夜祭…、全ての思い出が出会いから生まれ、そして今の自分を作っています。高等部での全ての出会いに感謝して、これからの生活に役立てていきたいと思っています。



## 神ともにいまして

光延 伊知朗  
(経済学部経済学科4年)

振り返ると、本当にあっという間の4年間でした。

私は、大学に入学し初めてキリスト教に触れました。所属する大学聖歌隊の活動をきっかけとして、まだまだ未熟ながらも音楽を通して神を賛美できる喜びを知りました。常にキリスト教と音楽が自分に在る充実した時を過ごすことが出来たことを心か

ら感謝しています。

特に、大学聖歌隊での活動の一つである「演奏旅行」では、現地の方々の温かい支えをいただき、また隊員だけでなく、その場に在る全員で共に賛美を出来る素晴らしさを体験出来ました。そして、現在の自分の礎である「愛」へと辿り着けたように思います。

「初めて尽くし」を楽しんだ大学生活は終わるものの、キリスト教を通して与えられた「愛」の追求は、まだスタート地点に立つばかりです。与えられた恵みに心から感謝して、真摯に、祈ることを忘れずに、これからの日々を歩いていきたいと考えています。



## インディペンデント・ラーナー

加納 孝代  
(英文学科教授)

「自分が一人になっても学び続ける人」という意味の「インディペンデント・ラーナー (Independent Learner)」という言葉があります。この春卒業していく皆さんに私からお贈りしたい言葉です。

私の専門分野は比較文学ですが、その研究方法はテキスト (対象の文章) を一字一句丁

寧に読むこと、意味の解明に際しては自分の参照した資料の出典を示すこと、その上で自分の解釈と評価を公表するというものです。言い換えれば、根拠と責任を明確にして自分の考えを述べるということです。

この方法は、皆さんが今後直面する種々の問題に応用できるものではないでしょうか。「神の前に真実に生き、真理を謙虚に追求」することを青山学院で教えられてきた私たちに、いま神が求めておられるのは、誠実さだと思います。願わくはその誠実さが知的なものでありますように。そしてその「知的誠実」を支えるために、皆さんには一人になっても学び続けるインディペンデント・ラーナーであり続けてほしいと願っています。



## 短大で得たもの

佐藤 知子  
(英文学科2年)

短大に入学すると同時に、シオン寮での生活を始めることができた私は本当に恵まれていたと思います。シオン寮では毎朝決まった時間の礼拝、週一回の夕拝などをとおして、神様の御心に多く触れることができました。同時に、離れている両親への心からの感謝の気持ち、お世話をしてくださる寮監・副寮監や職員の方々や、シオン寮

を愛してくださる先生方への感謝の気持ち、そして素晴らしい友人たちと出会わせてくださった神様への感謝の気持ちなど、本当に「感謝」という二文字を日々実感しながら生活を送ることができた2年間でした。「知識を得る為の学習」よりも更に深い、人生において最も大切なものを得ることのできた短大生活、そしてシオン寮での生活は、私にとってかけがえのない宝物となりました。

短大を卒業して社会に出ても、いつも感謝の気持ちを忘れずに、今まで与えていただいた御恵みを、これから多くの方々へお返ししていきたいと思っています。



## 恵みの結晶

長坂 帆那  
(経営学部経営学科4年)

卒業を間近に今思うのは、本学でのこの4年間でどれほどの恵みの結晶であったかということだ。それはこの4年間に、豊かな学びの時間が与えられたというだけではなく、学生生活の中に確実な神の介入と導きがあったと実感するからだ。

私は本学が守り続けている大学礼拝において、多くの神からの語りかけを聞くことが

できた。それは、私たちの学びや学生生活が神の御心に即したものであるのか、また私たちの今の生活は神の前によく生きている姿なのかを問われ、確認する時間だったからだ。礼拝が学びの間に置かれて神からの語りかけを介して学びを進められるのは、そのような意味でとても尊いことであった。

一年次より所属した青山キリスト教学生会では、友人と、聖書の御言葉を通して神の語りかけを探り、共に祈る時間が与えられた。そこで出会った友はなににも代え難い財産だと思う。

私はこの4年間を神に心から感謝し、そして今後の道にも神の介入と導きがあると信じ進んでいきたいと思う。

# 出発にあたって 先生がたからの すいせん図書



①

## 『生きるためのひとこと』

晴佐久昌英 著  
女子パウロ会

「おはよう」「ってきます」「いいよ」「なんとかなるさ」「ごめんなさい」「ありがとう」……

日常生活でよく使っている何気ない64の言葉を取り上げたエッセイです。

母からのことば、父からのことば、夫からのことば、妻からのことば、友からのことば、先生からのことば、子どもからのことば、そして、あなたのことば。

そのひとことに、温かさや力が秘められていることを実感できる1冊です。



②

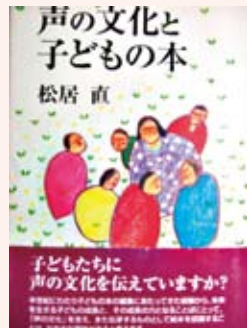
## 『かぜは どこへいくの?』

シャーロット=プロトウ 作 ハワード=ノッツ 絵 松岡享子 訳 偕成社

「かぜは、やんだら、どこへいくの?」小さな男の子には、不思議なことがいっぱい。寝る前に、お母さんに尋ねます。

お母さんは答えます。この世のものは全て終わるのではなく、別の場所で、別の形で始まる、ということ……

幼稚園を卒園すると、4月からは小学1年生が始まります。どうぞ、たくさんのお不思議を感じる心と、それを知りたいという気持ちをもって、楽しく学ぶ人となっていって下さい。



③

## 『声の文化と子どもの本』

松居 直 著  
日本キリスト教団出版局

筆者の長年の絵本編集の経験から、声で伝えることばの大切さと、そのことばを聴く力を育む絵本について紹介。絵本を通じての国際交流や、親から子へ世代を超えて伝わる「ことば」の豊かさなど、「ことば」の無限の可能性が語られている。子ども達に与える本は、「文字の文化」でありながら、その伝承は本質的に「声の文化」でもあるということ、そしてその重要性を再認識させてくれる一冊である。



⑦

## 『世界がもし100人の村だったら』

池田香代子 再話 C・ダグラス・スミス 対訳 マガジンハウス

世界を100人の村に縮めたらどうなるか。「村人のうち1人が大学の教育を受け、2人がコンピューターを持っています。けれど14人は文字が読めません」「すべてのエネルギーのうち20人が80%を使い80人が20%を分けあっています」

60億人を超える人々が今この瞬間にもともに生きている地球。その現実の姿に衝撃を受けます。様々な人々からなるこの村を愛し、村の現状をよく知り、100人が共存していく道をともに考えたい。



⑧

## 『夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録—』

ヴィクトール・E・フランクル 著  
霜山徳爾 訳 みすず書房

ユダヤ人心理学者が自らの強制収容所体験を綴った作品。ナチスの残虐行為に表れる人間の醜さと狂気、それとは対照的に、絶望的な収容所生活の中でも人間としての誇りと良心を失わなかった収容者たちの存在が感動的に描かれています。「人生から何をわれわれはまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何をわれわれから期待しているかが問題なのである」という言葉は、困難に直面した時に心の支えとなるはずです。



⑨

## 映画『サウンド・オブ・ミュージック』

ロバート・ワイズ監督 ジュリー・アンドリュース出演 DVD(20世紀フォックス ホーム エンターテイメント)

自伝にもとづく有名なミュージカル映画です。新たな使命のため修道院を出る際、マリアは「When the Lord closes a door, somewhere He opens a window.」とつぶやきます。神は乗り越えられない試練を与えないという意味で、何度見ても心が強められます。問題に立ち向かう勇気を与えられる場面は他にもありますが、明るいまリアと一緒に「ドレミの歌」「エーテルワイス」などの名曲を歌い、いつも前向きに元気よく歩いてゆきましょう。



選者：①浅野 謙(幼稚園)、②久 洋子(幼稚園)、③田中和美(初等部)、④中川郁太郎(初等部)、⑤・⑥有賀実男(中等部)、⑦小林和夫(高等部)、⑧堀内真実(高等部)、⑨荒木純子(女子短大)、⑩西願広望(女子短大)、⑪大森秀子(大学)、⑫台 豊(大学)



④

『生きることの意味—ある少年のおいたち』

高 史明 著  
ちくま文庫

在日朝鮮人の二世として、さまざまな差別や困難のなかに半生を過ごした作者が見出した「生きることの意味」とは…この本は、わずか12歳で自らの命を絶った作者の息子、岡正史の遺稿集「ほくは12歳」とともに、「自分という存在を背負って生きる」ことを、切実に問い続けています。人間らしく生きることの難しい今の時代にこそ、こうした問いかけに真剣に向かいあっていきたいものです。



⑤

『インディアスの破壊についての簡潔な報告』

ラス・カサス 著  
岩波文庫

16世紀以降スペインはキリスト教布教を名目に中南米へ侵攻し先住民であるインディオの食糧を強奪、金銀の採掘等強制労働をさせた。始めの40年間だけで1500万人以上のインディオが犠牲になったという。この書は司教ラス・カサスが当地で目撃したこの非道な収奪、虐殺を中止するよう本国スペイン国王カルロス5世に提出した報告書を基に1542年に書かれた。キリストの名の下で行われたこれらを私達は知る義務があると思う。



⑥

『余の尊敬する人物』

矢内原忠雄 著  
岩波新書

尊敬する人がいる人は幸と思えます。その人から生きる模範、姿勢、方向が自ずと示されるからです。この書はエレミヤ、日蓮、リンコ（カ）ーン、新渡戸稲造、イザヤ、パウロ、ルッター、クロムウエル、内村鑑三を2冊に分け、彼等の高邁な精神と人間性の深みを簡潔に著しています。私達の人生に示唆を与えてくれるのはもちろんですが、キリスト教主義学校に学ぶ者、学んだ者の教養としてもぜひお勧めします。



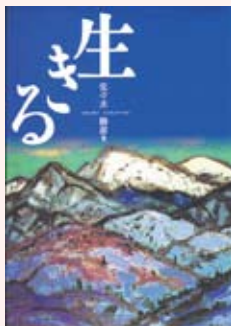
⑩

『レ・ミゼラブル』

ヴィクトル・ユゴー 著  
清水正和 編・訳 福音館

読むつど発見がある。二度目なら新潮文庫の方が良い。ミリエルは位の高い法官の家に生まれたが、若い時は放蕩三昧。しかし革命で全てを失い、司祭になる。しかしその後「革命の子」ナポレオンに認められ、司教に。そんな人生をおくった彼だからこそ、ジャン・ヴァルジャンの罪をも赦せたのだらう。

罪とは、神が用意した道を歩まないこと。卒業生諸君、神が君に何を望んでいるかを常に考えなさい。



⑪

『生きる』

佐々木勝彦 著  
青踏社

東北学院大学の教授が、生きることに苦しみ根源的な問いにぶつかる大学生に向かって、真正面から平易な言葉で応えるメッセージ集。「ひとつの目で見ると、ふたつの目で見ると、ものが立体的に見える」と著者は語り、人生において自分の眼と神の眼を用いることを示唆します。破壊のカルトや怪しいオカルトの解明から、P・トゥルニエの世界へと飛躍する本書は、読者に本当の生きる勇気を与えてくれます。



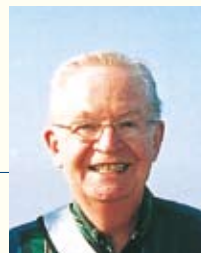
⑫

『氷川清話』

勝海舟 著 江藤淳・松浦玲 編  
講談社学術文庫

勝は、幕末から明治維新という数百年に一度の大変動期に、日本の近現代の基礎を築いた豪傑の一人です。彼の痛快な生き様は、目先の流行に流されないこと、他人の評価に支配されないこと、不遇の折りに力を蓄えて次機を待つこと、人を“背景”で判断しないこと、弟子をつくらず次代を育てることなどなど、多くのことを教えてくれます。もし関心を持ったなら、『海舟語録』（同じく講談社学術文庫）も手に取ってみてください。

# 青山学院を退職するに当って、 一人の宣教師の思い



ロバート・M・タヒューン

宣教師、女子短期大学教授

12才の時に聖書との親しい交流を始めてから今まで、神様の御言葉が、自分の生活状態や問題に直面した時にいつもぴったり当てはまって、自分を励まし、また支えてくれました。その一つ一つがその時その時のキーワードとなり、自分の信仰生活のモットーとなりました。

短期大学の私の研究室の戸口の横にローマの信徒への手紙の御言葉を貼り、部屋に入って真っ先に目につく所に、私が以前書道を学んだ時期に書いた御言葉、旧約聖書のコヘレトの言葉3章11節「神はすべてを時宜にかなうように造り…」というところを掲げてあります。それらは研究室に入る度に語りかけてくれるのです。そして同じコヘレトの言葉3章の1節からの御言葉も頭に浮かんで来ます。それは「何事にも時があり、天の下の出来事にはすべて定められた時がある」というもので、今の自分にも力強く慰めと励ましを与えています。

神の導きによって日本で長い年月伝道生活を続けて参りました。日本に到着して一年半日本語学校で厳しい訓練を受けた後、伝道の最初の場として鳥取に導かれ、そこでの14年間のさまざまな経験を通して、日常会話と読み書きが出来てきました。その後、家族の事情で一時アメリカに帰国せざるを得ない時期がありましたが、回復して、再び日本での宣教の業を祈り求めました。すると東京の足立区で、宣教師が創立した西新井教会が教会創立50周年の記念と教会の更なる発展のために合同メソジストのミッション・ボードに宣教師を求めていることがわかり、その応答として私が遣わされたのです。

8年半、聖日礼拝の話とその準備、信徒の家で続けた聖書研究会、青年会の指導、様々な記事を書くことなど充実した仕事ことができました。それだけではありません。振り返ってみると、それは1993年から青山学院女子短期大学で教える準備となり、それを抜きにしてこの15年間の勤めは出来なかったと思います。一步一步「神はすべてを時宜にかなうように…」導いてくださり、支え、強めて下さったからこそ今があると確信しています。

間もなく私と妻の生活は転機を迎え、大きな変化が訪れます。退職の時です。ご存知の通り、これは「普通の退職」ではなく、40年を共にした友人との生活で私たちの第二の故郷になっている日本を離れ、25才の時に後にして、現在の私たちにとって既に「異国」になった国アメリカに行くということを意味します。私たちの三人の子どもたちと孫たちを含め、親族と友人たちは私たちの帰りを楽しみに待っているようですが、私たち二人にとっては皆さんから離れて行くのは非常に苦しいことです。それでも、悲劇的としか見えないこの止むを得ない状態の中に、神様の御旨があることを信じています。今まで、神様がその時に合った道に導き、それを次の生活の土台として下さったように、日本において、特に短期大学で得られた貴重な体験は私の今後の「第三の人生」の準備材料になったと強く思います。パウロが自分の経験でわかったこと、つまり神は「……万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています」（ローマの信徒への手紙8：

28) と言っているように、これは神様の導きであると同時に、自分に神様が備えて下さった「時」でもあると信じています。

女子短期大学の教師、宣教師であると同時に私は青山学院の宣教師の一人として非常に恵まれました。それは、短大の事情を知るとともに、学院全体の組織を知り、関わる機会が多く与えられましたから。各部における礼拝を担当し、そこにいる生徒、部長や学長、教員やスタッフとの交流ができました。また、学院宗教主任会、常務委員会、評議員会、理事会などへの参加を通して、青山学院の全体像を少しでも理解することができるようになったと感じます。

そして今、私が明らかに言えることは、青山学院は現在学院としてかかげている教育方針、つまり「…キリスト教**信仰**にもとづく教育を…」確かに目指しているということです。幼稚園、初等部、中等部、高等部、女子短期大学、大学、大学院のいずれもこれは明らかです。幼稚園には学院長、そして各部においては宗教主任が工夫された様々なプログラムを通してキリスト教の信仰を一生懸命広めておられます。しかし、学院の教育方針をより前進させるには、キリスト教に理解を示す教員とスタッフというのではなく、キリスト教信仰を持って自分の専門分野を教える人材が必要で、仕事を通して信仰を具現化する努力が欠かせません。

私はいつも、そうしてこそ「キリスト教**信仰**にもとづく」と言うべきだと思っています。なぜなら「精神」の意味が曖昧にされがちだからです。青山学院教育方針について語る時、ある方は「学院の教育はキリスト教精神にもとづいている…」というふうに気軽に表現されます。キリスト教**信仰**と、キリスト教に理解があるということは同じとは言えません。これは誤解しないで頂きたいのです。信仰を持っていない方々を批判しているのではありません。しかし、信仰がなければ、努力してもキリスト教の精神は生まれません。信仰によってのみ、人間の最高レベルといわれている思想、哲学、知恵をはるかに超える創造主なる神のお働きを感謝を

持って受け入れる回心精神が出来るのです。幼稚園、初、中、高、短大、大学と上にゆくに連れてキリスト教教師の数が減っているのは明白です。それに対して、生徒の数は逆に増えています。誤解しないで頂きたいのです。キリスト教でなければその教育の業は貧しいとか優れていないというわけではありません。ただ、「キリスト教**信仰**にもとづく教育を目指」すのですから、キリスト教**信仰**を身に締めた教員を増やす努力が青山学院の真剣に取り組むべき課題ではありませんか。キャンパスの改革の「マスタープラン」を果たそうとする現在、建物、施設の充実は勿論重要ですが、教育の心の面は最も大切なことと思います。この一年、常務委員会と理事会の一人として多くの人事を見て参りました。いま各部で迎えようとしている新しい教授、准教授等でキリスト教はごく一部です。これを強く意識して、積極的にキリスト教教師の募集を強く勧めたいのです。

キリスト教の教師が全国的に少ないのは現実です。それで青山学院が経済状況に合わせて奨学金を増やしている現在、中・高等部、大学にいて将来高等教育に携わりたいキリスト教の若者へ返金不要奨学金を作ってはいかがですか。限られた数のキリスト教教師をキリスト教関係学校が競争し合って迎える状態のなかで、青山学院は積極的に教育者の卵を生み出し、養うべき時ではないでしょうか。それは青山学院の教育方針を実現するために学院として優先すべき課題の一つであると強く思います。

15年間の学生、教員やスタッフの一人一人との協力教育作業を宝のような経験であったことを感謝しつつ、米国に帰りますが、「さよなら」と言わず、「また会う日まで」と言いたいと思います。皆さん一人一人のこと、青山学院のこと、私の第二の母国である日本を心に抱いて行きます。皆さんの上に父なる神様の御恵みと祝福をお祈りします。今も、そして今後はアメリカの地から絶えず日々祈ることを約束いたします。

#### 氣賀 健生

大学名誉教授

青山学院資料センター所蔵のキリスト教貴重文献・史料紹介第22回は、ディッフエンデルファーの1941年現在の日本の社会状況とくに教会事情についての報告書を取りあげます。Dr. Ralph E. Diffendorferは、メソジスト教会ミッションボード主事で、プロテスタントの主要なミッションボードの間でも古参の幹部であり、第二次世界大戦後、北米教会連盟協議会および北米外国宣教協議会評議員会の席上、日本におけるキリスト教大学設立に関する感動的な呼びかけを行ない、両組織の支持を得て、国際基督教大学（ICU）の創設に、トロイヤー博士と共に深く関わった人物です。（ICUには彼を記念して通称D館とよばれる学生会館があります。）このディッフエンデルファーはトロイヤーと共に1949年6月に青山学院を視察しています。その詳細は1949年6月21日付青山学院理事会記録にありますが、それによると、両氏は青山学院の青山キャンパス及び横須賀分校を視察し、同分校の工学部を関東学院に譲渡することの意見を表明されました。この意見に基づき本学院では「地理的経済的見地より横須賀分校工学部を手離す」との結論を出しています。



ところで、今回とり上げるのは“Church and Mission in Japan, January 1941”と表題された報告書です。これは彼が1941年1月に米国メソジスト教会ミッションボードから日本に派遣され、日本社会の一般状況、とくに教会事情を視察した報告書で、ディッフエンデルファー自身がことわっているように、特にアカデミックな考察ではなく、現実には日本人すべての生活にとって見逃すことのできない問題、そして我々の（アメリカの）ミッションにとってもよくよ

く承知しておかなければならない問題の指摘です。訪問は1941年1月、報告書の日付は同年2月19日となっています。1941年といえば、この年の12月8日に日米戦争が始まった年で、日本国内では大政翼賛会のもとに国家総動員法が敷かれ、新体制運動のかけ声とともに、大学では軍事教練が必修科目となり、着々と日米戦争へ向けて、臨戦体制・非常事態の色が濃厚になっていた時でした。この時期に日本を短期間視察して、然も外国人の眼で、よくもこれ程綿密かつ適切に問題点を捉えたものと思われる報告書です。当然のことながら、これには日本側の情報提供者があったと考えられますが、勿論それが誰であったかは判っていません。ちなみにこの報告書はConfidential-not to be quoted（秘密調査書類—引用不可）となっていますが、書かれた時から50年以上経過していますから、現在これを明らかにすることは差支えない筈です。この報告書の当資料室への入手経路ですが、これは故クラメル宣教師から筆者がいただき、資料室に収めたもので、A4サイズ用紙に25枚ビッシリとタイプされています。目次の最後に“p.s. Value of Visit”（あとがき・訪問の成果）とありますが、そのページが失われていて、ディッフエンデルファー博士の本音或は本心の窺われると思われる部分が欠けているのが大変残念なところです。ではその報告書—

ディッフエンデルファーは、今日の日本の現状理解について銘記すべき留意点として、「天皇及び天皇制」と「イエ（家）」の指摘からこの報告書を始めています。彼は、まず天照大神から一貫して天皇と天皇制のプリンシプルが日本人の人生の中心である、と観察しています。これは憲法（明治憲法）第一条に明記されていて、天皇は不可侵かつ永遠に支配する神聖な存在である、またイエ（家）は家庭（ファミリー）より深い意味をもつ日本語で、歴史的・精神的に日本人の人生の中心であって、天皇こそは日本帝国とい

う「イエ」の中核である、というのが彼の理解です。そこから彼は国民的愛国主義的精神性としての神道が国家体制および国民生活におよぼしている影響について注目しています。神道の中核である天皇の御真影をすべての学校に配布し、これを特別に尊ぶこと、すべての家庭に神棚と神器をおくこと、神社参拝への関心の増大の強制的煽動を彼は指摘します。この神社参拝の強制的状況は、キリスト教の側にも少なからず影響を与えているが、これに対するキリスト教側の意見として、ディッフェンドルファーは、日本キリスト教団議長の富田氏の見解を紹介して、次のようにのべています。即ち、神社参拝は宗教的行為ではなく、愛国的国民心情に基づく行為であるから、これは信仰の問題ではなく、全体主義国家の機関の問題であって、教会が国家体制組織にどう対応するかという問題である、と。そして、牧師や代表的信徒の中にも、神社神道は国家的愛国的なもので真の宗教ではないから、キリスト教も神社神道と手をとり合ってゆくことができる、それでキリスト教も最近の「宗教団合法」のもとで生きてゆける、と考えている者が多い、と、ディッフェンドルファーは全くよく当時の多くの日本人のキリスト者の日本人的心理を洞察しています。

更に彼の炯眼は日本人の“同化力”に注目します。日本の歴史はこの同化力と祖先崇拜をぬきにしては理解できず、シナ、インド、儒教、佛教、そして西洋文明を次々と輸入し、更に全体主義をとり入れてこれを日本化し、現在極めて危険な政治の姿が浮き上がっていて、先が読めなくなっている、と分析しています。この、天皇を国家そのものとする日本的全体主義の統一原理を“新体制”とよび「国民精神総動員」という殆ど狂気じみたスローガンのもとに、今や、市民的自由、言論・集会・新聞報道の自由が奪われ、議会は“翼賛議会”となり、「隣組制度」が全国民を国家統制下におき、思想統制、教育の画一的編成化と、教育からの外国人排除が進み、経済的中央集権が発動され、日常用品の配給、贅沢品の購入使用禁止、更に全国民の強制登録、学校や教会さえも統制のもとにおかれるようになってきていると観察しています。

こうした風潮はまた日本と枢軸同盟を結んだドイツの影響によって拍車がかけている、とディッフェンドルファーは見ています。ドイツの青年指導者シュルツが現在日本に文部省顧問として来ているし、学校ではドイツ語が盛んに教えられ、軍隊の中では極右のナチ・グループが勢力を伸ばしていて、もはや日本の政治は文官の権限では何とも動かすことは出来ず、軍部の独裁へと進んでいる、というのが彼の観察です。憲兵や私服警察が至る所でドイツのゲシュタポ（国家秘密警察）まがいの行動を展開し、黒龍会をはじめテロリストの集団が幅を利かせはじめているし、満州やシナの事変、南方への動きは明らかに軍部の仕業である、と彼は断じています。それに煽られて、国民の側ではかなりの興奮の感情がある一方、この状況は普通の人間のコントロールを超えていて、「我々は今や盲目の力に乗せられている」という一種の諦観或いは宿命論のとらえ方も一般化しているように見えるけれども、この宿命論は恐らく佛教の影響であろう、とディッフェンドルファーは見ているようです。

こうした雲行きの中で、アメリカとの戦争はもはや避けられない、問題の解決は絶望的、という感情が最近数ヶ月あらゆる階層に拡がり、ルーズベルト大統領の炉辺談話、そしてハル國務長官の声明後特にひろまって、心配は台所、お店、タクシーの中、教師、牧師、医者、ビジネスマン、前駐米大使、前外務大臣、自由人、婦人達にまで及び、1941年1月には既に一般化している、というのがディッフェンドルファーの印象分析です。

ディッフェンドルファーの日本訪問報告書は、教会に対する国家体制の影響、教会合同の問題等まだ続きますが、紙数が盡きたので、あとは次回に。



※写真は2枚ともディッフェンドルファー、トロイヤール来校時のもの 1949（昭和24）年5月27日

## 日本基督教団 狛江教会

深谷いづみ

女子短期大学保健室

狛江教会は、「この狛江の地に教会を」との  
数人の祈りに神が応えてくださって始めました。  
2006年に着任二年目の岩田昌路牧師と  
共に「創立50周年信仰宣言」をささげ、御  
言葉に聞きつつ、伝道の幻に生きる教会とし  
ての歩みをすすめています。

毎週日曜日には、三回の主日礼拝が奉げら  
れています。第一礼拝(9時)は乳児から高  
齢者まで40名位が、第二礼拝(10時30分)  
は110名位、第三礼拝(19時)は15名位  
が集います。第一礼拝と第二礼拝の間に、C  
S分級(幼児・小学低学年・高学年・中学生)  
が行われます。第二礼拝後には、婦人会・壮  
年会・青年会などの集会や委員会活動の他、  
その月の誕生者祝福、成長・敬老等の祝福、  
昼食会や祝会等もたれています。

今年成人祝福を受けた5名の中には、青年  
会の中心メンバーとして活躍する青山学院  
大学の学生と女子短期大学の学生もいました。



青年会は、毎週の集会和CSや聖歌隊等の奉  
仕、中高生を招いての活動に加え、昨年は青  
年伝道キャラバンを沖縄の読谷教会と合同で  
実施し、次年度にも2月に青森でのキャラバ  
ンを予定しています。高校生以下の年代も、  
毎週のCSには20名前後ですが、キャンプや  
こどもクリスマスには大勢が集められ(クリ  
スマスの参加者は70名を越えました)、中高生・  
青年修養会など、多くの行事や礼拝を通して  
育てられています。洗礼によって、あるいは  
進学や転居に伴って、教会に加えられる青年  
が(もちろん他の全ての年代の方々も)数多  
く与えられていることに感謝しつつ、さらに多  
くのこども・中学生・高校生・青年達が、キ  
リストに出会い、生涯を主に支えられて歩める  
ように、プログラムを試行錯誤し、教会全体  
で祈りをあわせています。

岩田昌路牧師がキリスト教主義学校で奉仕  
する機会も増え、青山学院でも、今年度は初  
等部の保護者のためのクリスマス、中等部の  
伝道週間、女子短期大学・大学の礼拝等に赴  
きました。牧師の奉仕を通して、教会で学校  
のことが覚えられ祈られていることは、関係  
者にとって、嬉しく安心なことです。

平日には、祈祷会や家庭集会・子育て世代  
の会が行われ、親しい交わりを持っています。  
ぜひ、皆さんも狛江教会においでください。

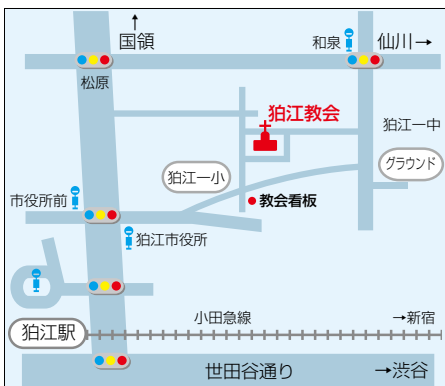
### 日本基督教団 狛江教会

狛江市和泉本町 1-16-12 Tel 3489-5044

<http://www6.ocn.ne.jp/~komae-ch/>

小田急線 狛江駅下車 10分

京王線仙川駅から調布駅行バス 和泉下車



# 宗 教 セ ン タ ー だ よ り

## 幼稚園 より

### 卒園礼拝

3月6日(木)

卒園を直前にした年長児と保護者が今年度は短大のタヒューン先生をお迎えして説教を聴きます。

### 終業礼拝

3月13日(木)

卒園式には出席しない年少組(3歳児)が年長児とお別れをします。

### 卒園式

3月14日(金)

3年間の思い出を胸に年長児、出発の時です。在園児代表で年中組(4歳児)が送ります。



(教諭 多々内三恵子)

## 初等部 より

雪の学校も終わり、6年生は卒業に向かってまとめの時を過ごしています。

### 宗教委員退修会

2月15日(金)～16日(土)

初等部のキリスト教活動について1年間の総括と次年度の行事予定などを検討します。

### 卒業礼拝

3月10日(月) 米山記念礼拝堂

6年生のみが参加する卒業礼拝。説教は小澤淳一宗教主任。

### 6年生を送る礼拝

3月14日(金) 米山記念礼拝堂

6年生から各学年に御言葉とともに「友情の火」を贈り在校生も御言葉で応える礼拝。奨励者は飛田教頭。

### 青山学院フィリピン訪問プログラム

3月22日(土)～28日(金)

例年3月に行っているフィリピンのスラムに住むスポンサーチャイルドを訪ねるプログラム。初等部から4名の児童と引率教員として古閑教諭、小澤宗教主任が同行します。なお、今回は大学および中等部と合同でプログラムを実施します。

(宗教主任 小澤淳一)

## 中等部 より

### 献金

生徒、教職員、保護者によって捧げられたクリスマス献金は、中等部祭での売上げと毎月の保護者聖書の会での献金とを合わせて、34箇所の団体・施設にお送りしました。また、月に一度ホームルームで捧げられている献金は、友情献金・CFJ献金・JOCS(キリスト教海外医療協力会)献金として用いられています。昨年9月分の献金(87,050円)は新潟中越沖地震被災者支援のためにお送りしました。

### 卒業礼拝

3月12日(水)

日本基督教団中渋谷教会牧師の及川信先生をお迎えして行います。

## イースター

欧米では伝統的に、イースター(復活日)を含む一週間程を、いわゆるイースター休暇としています。イースターは、長い冬に終わりを告げ、春や命の息吹を感じるときとしても覚えられますが、それは闇の中に光が輝く瞬間であり、新しい命の誕生の時であり、希望と喜びに包まれるときなのです。イースター・エッグやイースター・パニーは、いずれも新しいピュアな命をイメージさせるものとして伝えられています。

イースターは、キリストの復活という仕方で神が救いの出来事を成就した日です。プロテスタント教会やカトリック教会では、毎年春分の日後の満月の次の日曜日をイースターと定めています。聖書の記

述によると、イエス・キリストは過越祭の前に十字架につけられ、三日目にあたる週のはじめの日の朝早く復活されました。この復活によって、古い時代に終わりを告げて新しいキリストの復活の恵みに与かる時代が与えられたのです。そのため今日も多くのキリスト教会では、毎週日曜日の朝にキリストの復活と神の支配を覚えての礼拝を守ります。

イースターはとくに、ただキリストの十字架と復活という出来事を通して罪深き人間が神との和解に与かり、愛と平和と希望とに生きる者へとつくり変えられていくことを覚えるときです。困難は困難で終わりません。絶望は絶望で終わりません。そのあとに復活が続くという希望が、わたしたちに生きる勇気を与えてくれます。今年は3月23日がイースターにあたります。ともにお祝いいたしましょう。(い)

# 宗教センターだより

## フィリピン訪問プログラム

3月22日(土)～28日(金)

チャイルド(里子)を訪問します。参加生徒が4名、引率教員は2名です。なお、本年度は初等部と大学との合同で行います。

(宗教主任 西田恵一郎)

## 高等部 より

### クリスマス礼拝

高等部では12月19日(水)にクリスマス礼拝を行いました。第1部の礼拝では、宗野鏡子氏〔田園江田教会牧師〕が「さあ、ベツレヘムへ行こう」と題して意義深いクリスマスメッセージをして下さいました。

第2部の祝会は、佐々木冬彦氏によるハーブ演奏〔クリスマス曲等〕と楽しく感銘深いお話がありました。

### クリスマス献金

今回もクリスマス礼拝の中で、各クラス代表によってクリスマス献金が捧げられました。生徒、保護者(保護者聖書の集い出席者)、教職員、同窓会の方々によって捧げられた献金合計は、1,200,411円でした。アジアキリスト教教育基金(ACEF)、チャイルドファンド・ジャパン、アジア学院他、20の団体と卒業生伝道者13名に贈ることが出来ました。

### 卒業礼拝

今年度の卒業式は3月10日(月)ですが、それに先立って、卒業礼拝を3月7日(金)午後1時15分からPS講堂で行います。メッセージは大学前学長、武藤元昭氏、「謙虚に潔く」です。

(宗教主任 坂上三男)

## 女子短大 より

### 卒業礼拝

3月21日(金) 13:30～  
青山学院講堂

## 送別会

3月21日(金) 15:30～

\*卒業だ。学生諸君の学びのときが終わった。全てのものには終わりがあがる。人は死ぬ。花も死ぬ。恐竜だって滅んだ。ソビエト連邦も地図にない。しかし神の愛は永遠だ。

(宗教活動委員 西願広望)

## 大学 より

### フィリピン訪問プログラム

3月18日(火)～28日(金)

初等部、中等部との合同のプログラムです。大学からは4名の学生が参加し、フィリピンの人々に直接出会い、生活を共にしてきます。

### オーストラリア・クリスチャンファミリー・ホームステイプログラム

2月16日(土)～3月8日(土)

クリスチャンのホストファミリー宅に滞在し、現地校で英語研修、ボランティア、日曜日には礼拝出席とキリスト教や異文化の体験をします。

### 高等部内部進学生とのキリスト教懇談会

3月7日(金) 17:30～

宗教センター集会室3(青山キャンパス)

### 大学卒業礼拝

3月25日(火) 10:00～

ガウチャー記念礼拝堂

説教 大島 力 大学宗教部長



(宗教センター事務長 平野修一)

## 編集後記

むかしむかし、あるところに、一人の王様がいました。王様は、毎朝、家来に、次のように言わせていました。「王様、おはようございます。王様、今日、王様は死にます。」

これは元初等部部长伊藤朗先生の、礼拝でのお話の一つである。良いお話だった。そうだと。人も、組織も、「今日、死ぬ。今日、終わる。」という覚悟を持つことが大事だ。そうすれば、本当に、いま、何をしなければならぬかが、見えてくるはず。

卒業生諸君は、卒業後、30年経っても、覚えていられるような礼拝に、在学中、出会うことができましたか? (西願)

## Wesley Hall News 第95号

発行 青山学院宗教センター 宗教部長 嶋田順好  
東京都渋谷区渋谷4-4-25  
TEL.03-3409-6537 (ダイヤルイン)  
URL.<http://www.aoyamagakuin.jp/rcenter/index.html>  
E-mail.[agcac@jm.aoyama.ac.jp](mailto:agcac@jm.aoyama.ac.jp)  
編集 ウェスレー・ホール・ニュース編集委員会  
印刷 万全社